

二〇三三年一〇月二七日

宿料理うつは代はりに大紅葉  
堆く落葉を被る石仏  
畑に鋤忘れて来たり秋の雷  
腰落とし綱引きのごと大根引く  
十三夜一朵の雲もよせつけず  
嘶いて時代祭の動き出す

康子

ぼんこ

なつき

かえる

満天

うつぎ

二〇三三年一〇月二六日

途切れたる会話の卓に木の実落つ  
ごろごろと親芋子芋孫の芋  
夫逝くや慟哭やまぬ秋の暮

むべ

豊実

たか子

二〇三三年一〇月二五日

秋天に手を振るごとく玻璃戸拭く  
ハロウィンお化けのままに眠る孫  
秋扇ひらきて偲ぶ先師の句

あひる

康子

はく子

二〇三三年一〇月二四日

牛車軋む音も雅や時代祭  
園児らの声迫りくる秋山路  
境内にクレーン車の立つ神の留守  
朝窓を繰るや否やの鴈高音

うつぎ

せいじ

なつき

ぼんこ

二〇三三年一〇月二三日

落葉焚き炎かきわけ諸探す  
面会を辞して身に入む夜風かな  
この池に龍棲むといふ薄紅葉  
風神の来ませり庭に舞ふ落葉

千鶴

むべ

もとこ

素秀

二〇三三年一〇月二二日

一身を置きて秋思の深き闇  
野分晴山肌撫づる雲の影  
藁ぼつちあち見こち見に傾きて

素秀

かえる

明日香

二〇三三年一〇月二一日

石の上に石と化す亀池小春  
切株もある黄落の大並木  
そやなあと返す夫と長き夜  
湖囲む四囲の山並秋深し  
秋日影ガラス細工のバラ透かす

うつぎ

むべ

明日香

澄子

むべ

毎日句会みのる選・二〇三三年一〇月二九日